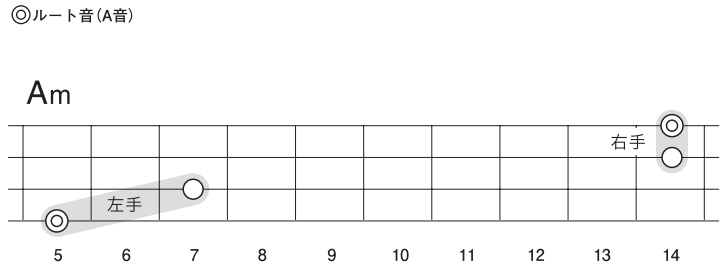


注意点1 理論

両手を使って4和音を鳴らすコード・タッピング

コード・タッピングとは、両手を使って1~4弦をタップして4和音を聴かせる奏法で、4弦のルート音を左手でタップする【註】場合と右手でタップする場合の2パターンがある。左手で4弦のルート音をタップする場合は、ルート音を低い音域で鳴らすので、ボトム感が出せる(図1)。一方、右手で4弦のルート音をタップする場合は、ルート音を高音域で鳴らすため、響きが多彩になるのだ。コード・タッピングでは、右手と左手のポジションが離れることがあるため、ポジションを目で追い切れずにミストーンを出してしまうことがある。事前に両手のタッピング・ポジションをしっかり覚えておこう。

図1 左手で4弦のルート音を叩くパターン

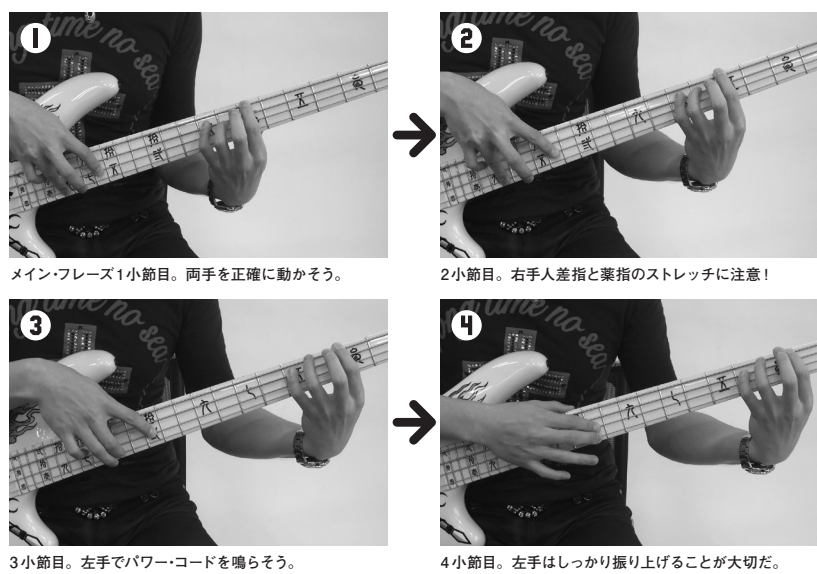


4弦のルート音を低音域で発音するため、ボトム感が出せる。

注意点2 右手&左手

右手のストレッチと左手の音量に注意しよう!

メイン・フレーズは、左手人差指が4弦のルート音、小指が3弦の5度を担当し、右手を使って1&2弦のコード・トーンをタッピングする。1&2小節目では右手を大きく開くことが大切で、特に2小節目の2弦14フレットの人差指と1弦18フレットの薬指に注意しよう(写真①&②)。3&4小節目に移ると、今度は左手のタッピングがポイントになる(写真③&④)。ローポジションにいくほど弦と指板の間隔が狭くなってタッピング音が出にくくなるので、左手を振り上げて、ルート音と5度をしっかり出そう。弦ごとに音量にバラツキが出ないように気をつけながら演奏してみてほしい。



~コラム23~
将軍の戯れ言

タッピングは、明らかに特殊技である。もし筆者が誰かに“タッピングは絶対にマスターしなければならないのか?”と聞かれたら、“決してそうとは言えない”と答えるだろう。しかし、タッピングという奏法を絵画の世界に例えるなら、画家に色数の多い絵の具を与えるようなものだといえる。つまりタッピングは、ベーシストの個性を広げ、バンド・アンサンブルにおいても多彩なアプローチを生み出すきっかけになるのだ。

タッピングが重宝する例を1つ紹介しよう。3ピース・バンドのギタリストがライブ中にソロを弾くと、バックিংはベースだけになるため、

ベースにタッピングは必要なのか? その大きな効能を解き明かそう

サウンドの厚みやコード感がなくなってしまうことがある。それもライブの醍醐味の1つと言えるが、ベーシストがタッピングを活用すれば、ボトム(=低音感)を維持したまま、コード感も出すことができる。このようにタッピングは、ライブなどの“実戦”の場で、非常に強力な武器となるのだ。またタッピングは、ベースを瞬時にメロディ楽器に変えてくれるという効能もある。そのためベースがボーカルやギターに比べて“地味だ”というイメージを払拭し、さらにベースの表現力をより一層高める効果もあるテクニックだと言うことも付け加えておきたい。



ボトム感とコード感を同時に出せるタッピングは、ライブにおいて大きな武器となるのだ!

【左手でタップする】左手で弦を叩くことは一般的にはハンマリングというが、このようなパターンではピッキングせずにいきなり左手で指板を叩くため、“タップする”という表現になる。